

第7回 水難学会学術総会 一般演題発表 概要

A1 様々な地形条件で発生する離岸流の流況について

<発表者> ○犬飼直之（長岡技術科学大学）

<概要>全国で近年に発生した水難事故情報のうち離岸流が起因する事故を把握した。また、砂浜や突堤、離岸堤付近など様々な地形条件で発生する離岸流の流況について調査や数値実験を行い把握した。調査では、海面着色剤で離岸流を可視化し、UAVで上空撮影した。また数値実験では波浪条件を変化させ離岸流発生状況の変化を把握した。

A2 Open Uitemate～米軍三沢基地における英語での「Uitemate 教室」

<発表者> ○原田夕香（一関市体育協会）、安倍志摩子（朝日海洋開発）

<概要>平成29年3月12日（日）青森県三沢市に所在する米軍基地にて「Uitemate 教室」を実施した。

水難学会は、着衣泳研究会時代の2012年より毎年国際ワークショップを開催しており、平成28年度活動方針の一つに「Open Uitemateを標語に世界普及を目指す」を掲げている。これに基づき、同年11月身近に所在する在日米軍基地より依頼を受け、これに承諾し共催に至った。学科実技とともに英語での指導となり、文化及び言語の異なる対象者への効果的な指導について考察する。

A3 高齢者に伝える「水の事故防止・自己保全」を考える～超高齢化社会への準備～

<発表者> ○鈴木直子（横浜市立みなと赤十字病院）

<概要>厚生労働省によれば、2025年以降には65歳以上が全人口の30.3%、75歳以上が18.1%との、超高齢化社会が数年後に訪れるとの統計が出ている。（平成28年度版厚生労働白書）その中で、高齢者による水の事故や自然災害で命を落とす等の報道は少なくない。

のことから、超高齢化社会を迎える前に、水の事故や自然災害などから、自分の安全は自分で守ること・自分の命を守ることについて、高齢者を対象に伝える必要があると感じ講習会を計画・実施した。講習では、地域のコミュニティーの場所であり、命の尊さが語り継がれている場所でもある「お寺」を会場として、①場所（立地）②地域特性を生かした説明③入水しない実技④楽しく学ぶ時間。この4つをポイントに実施。その内容及び実施後のアンケート結果から見えてきた、高齢者に伝える水の事故防止・自己保全の今後について考察する。

B1 三郷市着衣泳法普及推進事業 5年が経過して

<発表者> ○佐竹洋二、豊田修、京野俊二、斎藤和彦、天野尽、大倉弘司、近藤貴徳、池田光芳、篠田恭司、羽州貴広、渡邊優介（三郷市消防本部）

<概要>当市では、三郷市着泳法普及推進事業として市教育委員会・学校・消防が共同でういてまでを市内すべての全19小学校で計画的に行ってきました。この共同の取り組みが5年経過し、これまでに13,000人を超える児童・生徒・保護者がういてまでを受講している。これまでの本事業のあゆみと諸問題、改善してきた内容を報告する。

B2 静岡市内小学校におけるういてまで教室

生徒自身の自己分析・先生方の講評及び使用前使用後のプール

<発表者> ○森田恵美子（NPO法人 Grow wise）

<概要>静岡市内いくつかの小学校において、独自の事後調査を行った。対象は、3年生～6年生341名、3校の生徒に実施した。「生徒用ういてまで着衣泳授業の感想」・「教員用ういてまで実施報告」の2種類を事前に用意し回答をしてもらった。生徒用にはペットボトルなしの背浮き・ペットボトルありの背浮きで質問し、できなかつたにつ

いてはなぜできなかったのかを自己分析してもらった。教員用については、教員 18 名、11 校の教員に実施した。使用後の水質 PH や目視による水質変化の調査、講習内容についての質問に回答をしてもらい感想や意見の調査を行った。

B3 県立支援学校高等部ういてまで教室実施報告

＜発表者＞ ○中山博喜（山鹿市消防本部）、星子真徳（山鹿市消防本部）

＜概要＞平成 28 年に実施した支援学校高等部ういてまで教室の実施報告。

障害をもっておられる方は特にういてまでの知識、技術の習得が必要になると考える。これから、障害をもたれる方にもういてまでを普及させていくうえで、今回講習会を行うことになった経緯と講習会を実施しての反省点、注意すべき点を発表する。

C1 長岡高専水泳部、Uitemateへの挑戦

＜発表者＞ ○大湊佳宏（長岡工業高等専門学校）

＜概要＞水上安全法救助員 I の資格を取得した、本校の水泳部員は、平成 25 年（マレーシア）と平成 26 年（フィリピン）で開催された、Uitemate 国際ワークショップにそれぞれ 5 名ずつ参加し、彼らの体験を発表した。その過程や、本プロジェクトの教育的効果について論じる。発表の際に長岡高専生を対象に実施したアンケート調査結果（未発表分：着衣泳の普及、水難理解など）についてもご紹介する。

C2 受講者が求める指導法を考える

＜発表者＞ ○徳永龍貴（豊後高田市消防本部）

＜概要＞平成 28 年度水難学会の活動方針として、効果的な教育手法の開発について掲げられた。そこで、指導者側からではなく、受講者側が求める指導内容・指導方法について考えてみた。どのような指導者・説明（内容・方法）・プログラム進行、そして教室終了後にどのようにになっていいか？指導法として、態度・言動・コミュニケーション法・話し方・伝え方・雰囲気づくり・楽しさ・進行・時間管理・説明等、ういてまで教室の普及・効果的な教室となるよう、より良い指導法が求められる。